吊吟盟霊　藤井芳洲

隔断人間明與幽　法筵懐舊暗催愁

壇頭仰見生前貌　稽顙焚香涙自流

【読方】　吟盟の霊を弔ふ　藤井芳洲

隔断す人間の、明と幽と。　法筵、舊を懐ふて、暗に愁を催す。

壇頭仰ぎ見る、生前の貌。　稽顙香を焚けば、涙自ら流れる。

【作者】略

【語義】（隔断）人間を再び逢ふ事の出来ぬ処に離別せること。（明与幽）明は現世、幽はあの世、即ち生前と死後。（法筵）死人を葬送する時の式、また招魂慰霊祭寺の法事を云ふ。（壇頭）仏壇、又は法事の為に設けられた祭壇。（生前貌）故人の生前の容貌。（稽顙）ひたいを地につけんばかりにして伏すること。

【大意】生者必滅、人はこの世に生を得たが一度は必ず死す。形あるものは壊れ、生あるものは、必ず、滅す、これは誰れもが自覚しているが、吾が、興道吟詩会発足以来、本会の為又は吟道の為に多大の功績を残した多くの同志が、幽明を隔て、尋ねるすべもない。今日吾が一門は物故された恩師や先輩の霊を慰め祭る法要を営むのである。自分はこの席に列し静かに在り日の事などを懐ひ出し、無常なる定めと観念しながら、なんとはなしに愁を禁ずることが出来ない。祭壇に安置せる写真を瞻仰すれば、今にもなにか語らんとして笑んでいるかに見える。香を献し低頭すれば眼頭が熱くなり止めどもなく涙が流れるのである。

【備考】語は尋常と雖も意は凄絶、哀情以つて英魂を慰むるに足るものである。この詩は十一尤の韻を押した七絶である。「高橋藍川評」

発行所　大阪府泉佐野市鶴原泉丘六五八
日本興道吟詩会総本部
電話泉佐野(〇四二四)②—二五一三番

61 7-23